

2018. 11. 30

No.210

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

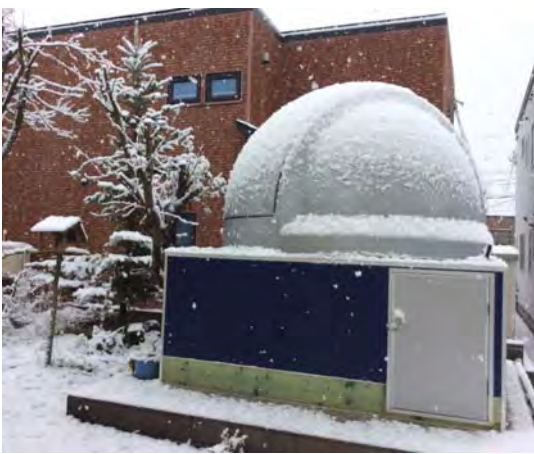
郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間1,000円)



ひとりの力は小さいけれど無力ではないと 信じてもう少し書き続けます



北海道はようやく雪が降り、一気に冬景色になりました。この2ヶ月は私にとって考えさせられることの

多い日々でした。みなさまはお変わりありませんでしたか？

元慰安婦の証言を伝える記事を「捏造」とされ名誉を傷つけられたとして、元朝日新聞記者の植村隆さんが櫻井よしこさんらに損害賠償を求めた訴訟の判決が11月9日、札幌地裁であり、岡山忠広裁判長は請求を棄却しました。弁護団や支援者らは勝利を信じていただけに、失望と怒りの声があふれました。私は傍聴できずに朗報を1階で待っていましたが「民主主義は失われている！」と怒りで震えました。

植村さんは記者会見で「悪夢のような判決でした。私は法廷で、悪夢なのではないか、これは本当の現実なんだろうかとずっと思っていました。今の心境は、言論戦で勝って、法廷で負けてしまった、ということです。櫻井氏は3月の本人尋問では、いくつもずさんな間違いを認めていった。あの法廷と今日の法廷がどうつながるんだろうか」「激しいバッシングを受けたとき、これは単に個人の問題ではないということで様々なジャーナリストが立ち上がってくれました。いまま新聞労連、日本ジャーナリスト会議、リベラルなジャーナリストの組織も応援してくれています」「この裁判所の不当な判決を高等裁判所で打ち砕いて、私は捏造記者でないということを法廷の場でもきちんと証明していきたいと思っています」と述べました。

報告集会での参加者の報告は2～4pをお読

みてください。

10月、北海道胆振東部地震から1ヶ月が過ぎても結構強い余震が続き、「いつも体が揺れている感じ」に体調がよくありませんでした。

10月9日に泊廃炉訴訟で意見陳述をしました。その時の参加者の感想を、廃炉の会のMさんが送ってくださいました。「意見陳述はタイムリーで説得力がありました」「時宜を得た内容で、北電のブラックアウトによる泊の管理能力を問題提起した点は、傍聴のマスコミにも訴える力があると思いました。『北電への手紙』で29年前から反対の声を上げ続け、原発差し止め廃炉への思いを深めてきたことは、裁判官に対し時代と歴史を作っていく判決の重さを求めるものとなったと思います」等の感想や意見に励まされました。思いがけず表舞台にたつ貴重な経験になりました。その体験を「週刊金曜日」(11月30日号)論争欄に「ブラックアウトから考える電力のこれから」という題で寄稿しました。機会がありましたらご覧ください。

5月の連休明けから、自宅庭に天文台を作り始めました。ドームはグラスファイバー製で本州に発注しましたが、天文台の設計の一部は夫が図面を引き、地元の土木業者さんに施工をお願いし10月末に完成しました。名づけて「銀河天文台」です。(左上写真)まだ望遠鏡の調整が終わっていません。完成の暁には是非、星見にいらしてください。

10月中旬に韓国に住む植村さんを、仲間と訪ねました。日本の侵略でどれだけ韓国人々が苦しめられてきたかを歴史館などで学びました。(4～5pに見聞録)。そして今回の「不当判決」でした。植村裁判のこと、原発のこと、平和や人権のこと。来年も書き続けたいと思います。

1年間ご愛読ありがとうございました。少し早いですが来年もよろしくお願ひします。郵送料が値上げしました。心苦しいですが、来年から郵送読者は年間1500円の負担をお願い

植村裁判判決報告集会に180人！



2018年11月9日 会場 かでる2・7で
集会発言者（写真各段左から＝敬称略）

1 段目：小野寺信勝、上田文雄、植村隆、伊藤誠一、神原元

2 段目：安田浩一、新西孝司、姜明錫と韓国大学生

3 段目：北岡和義、水野孝昭、原島正衛、崔善愛、新崎盛吾、南彰

4 段目：植田英隆、喜多義憲、七尾寿子、三上友衛、岩上安身



判決報告集会は、11月9日、記者会見の後、午後6時過ぎから道庁近くの「かでる2・7」大会議室で開かれた。夕方から降り出した雨の中、約180人が集まり、会場はほぼ満席となった。

最初に弁護士小野寺事務局長が判決内容を解説し、問題点を指摘した。つぎに

「植村裁判を支える市民の会」共同代表の上田文雄さんと植村隆さんが、判決に対する考えと今後の決意を語った。その後、裁判を支援してきた人々がリレートーク形式でそれぞれの思いを語った。

判決は期待を裏切るものだったが、会場に重苦しい空気はなく、植村裁判を力強く支えていく思いを共有し決意を固める集会となった。集会は午後9時前に終わった。（text by HH）

19人の発言 要旨＝発言順

【弁護士報告】 小野寺信勝・弁護士事務局長

■判決は、「植村さんが記事を捏造した」と櫻井氏が書いたことを、名誉棄損に当たると判断した。しかし櫻井氏に免責される事情を認定し請求は退けられた。「植村さんが記事を捏造した」と判断されたのではない。金学順（キム・ハクスン）さんがどういう経緯で慰安婦になったか、裁判所は認定できないとした。その上で櫻井氏がいろいろな記事や訴状を見て、継父によって慰安婦にさせられたと信じたのは、やむを得ないとした。また植村さんの妻が太平洋戦

争犠牲者遺族会の幹部の娘という親族関係から、植村さんが公正な記事を書かないと信じてやむを得ない、としている。

■判決はさらに、植村さんが意図的に事実と異なる記事を書いたと、櫻井氏が信じたのもやむを得ないとした。だが一足飛びに「捏造したと信じた」というのは論理の飛躍だ。それに櫻井氏が、事実に基づいて物事を評価するのが職責のジャーナリストであることを考慮していない。

■櫻井氏の本人尋問では、杜撰な取材ぶりが明らかになったが、これでは、不確かな事実であっても信じてしまえば名誉棄損は免責されてしまうことになる。櫻井氏の職責を無視した非常に不当な判決だ。

控訴審で争うことになるが、「事実の摘示か論評か」ではなく、「植村氏が捏造したと櫻井氏が信じたことはやむを得なかったかどうか」、その1点が争点になる。

■一読するだけで判決には論理の飛躍があり十分乗り越えられると思う。今日の判決は非常に残念だし不当な判決だが、控訴審で勝利判決を報告できるよう努力したい。ぜひご支援いただきたい。

【あいさつ】上田文雄（支える会共同代表）

■北星事件と植村バッシングの当初から、私たちは民主主義社会における許し難い言説として、問題の真相を語り、闘う意味を伝え、多くの支援を得てきた。支援された方々に心から感謝します。だが判決は、市民の良識と正義感を打ち砕く、まったく不当な判決となった。

■私は司法が、櫻井よしこ氏の杜撰な取材を叱り、ジャーナリズムに高い水準を強く求める判決が欲しかった。控訴審でも、この裁判が持つ意味をさらに多くの方々と共有していきたい。

【あいさつ】 植村隆さん

■悪夢のようだった。典型的な不当判決だ。私は承服できない。高裁で逆転判決を目指すしかないと思っている。櫻井氏が自分に都合のいい理屈で私を捏造記者に仕立てようとしたが、本人尋問（3月23日）でその嘘がボロボロ出てきた。裁判でただ1人の証人、元北海道新聞記者の喜多義憲さんは、私が書いた数日後、金学順さんにインタビューした。当時の状況を証言し、櫻井氏らの植村攻撃を「言いがかり」と証言した。

■新聞労連や日本ジャーナリスト会議は支援を組織決定した。ジャーナリストの世界では植村は捏造記者ではない、櫻井氏がインチキしていることは知られているが、それが法廷では通用しない。私は言論の世界では勝っているが、この法廷では負けてしまった。

■私が怒っているのは、櫻井氏らの言説によって、名乗らないネット民たちが娘の写真を流したり、大学に脅迫状を送るなど、脅迫行為が広がったことだ。こんなことを放置した

ら、家族がやられる。20年前、30年前の記事に難癖つけられたら、ジャーナリスト活動ができなくなる。

■困難な戦いだったが私は皆さんと出会えた。敗訴した集会で、こんなふうに会場が満員になる。市民は我々の側にある。我々は絶対に負けない。ありがとうございました。



【リレートーク】

■こんな判決がまかり通る社会
安田浩一さん（ジャーナリスト＝判決を傍聴席最前列で聞いた）
ふざけた判決だ。「これはダメ」と思いこめば、それ

がまかり通る。こんな判決を許してはいけない。だが裁判官だけの問題でも、被告だけの問題でもない。いま私たちはどういう社会の中で生きていくのかそれを自覚して反撃しなければならない。植村さんの家族が脅迫を受けたが、私たち社会はこれを放置してきた。多くのジャーナリスト、メディア、書き手、安田純平が、取材をするだけで叩かれる。取材をしない人間が堂々と記事を書いて逃げ切る。そんな社会を許さないという強い覚悟が必要だ。

■妖怪をバックにしている櫻井

新西孝司さん（「負けるな北星！の会」呼びかけ人＝植村さんは「北海道の僕のおやじ。新西さんの書齋は僕の応接間代わりだった」と紹介した）
子どもがいない私は、喜んで一種の疑似親子を演じてきたが、今日から本当の親子になったし孫もできた。相手は安倍政権や右翼勢力という妖怪をバックにした櫻井よしこ。これからも一緒に闘いを広げていきましょう。

■若者同士の冷たい視線

姜明錫さん（早稲田大学大学院生＝北星学園大の植村さんの教え子。判決の取材で来た韓国カトリック大学新聞部の学生記者4人の自己紹介を通訳した）

判決を知った時、これでネット右翼は櫻井勝利で炎上していくと思い、悲しくなった。東京で留学生生活をしていると、若者同士でも冷たい視線を経験する。僕はこの後も長く日本に住むと思うが、安心して暮らせるかと不安になる。その意味でこの裁判は僕にとって大事な裁判です。植村先生を応援し、一緒に戦っていくつもりです。

■判断力失った日本社会

北岡和義さん（支える会共同代表＝判決を傍聴席で聞いた）

植村裁判は、日本で言論がいい加減なものになっていることを示している。社会全体が、正しいか正しくないかの議論が出来なくなってきた。植村裁判は時代が大きく変わろうとしているとき、自分たちがこれからどう歩いていくかを分ける事件だ。私は癌の治療を続けている。生きるか死ぬかとなったら、病気もメディアも同じで、もうだめだと思ったら負ける。これだけの皆さんが集まっているのだ。必ず前進する。

■私たちは負けていない

水野孝昭さん（神田外語大教授＝朝日新聞で植村さんと同期入社）

4年前の今ごろ、北星学園大学の彼のポストが危なかった。札幌のみなさんが立ち上がって、北星学園はポストを守り、学問の自由を守ってみせた。娘さんを脅したネトウヨの男は罰金刑をくらい、秦郁彦や櫻井よしこは訂正を次々に出した。植村さんの記事は捏造だなんてもうだれも書けなくなった。私たちは負けていない。植村さんが戦い続ける限り、私たちはついて行く。

■民主主義を鍛える運動

原島正衛さん（北星学園大教授＝植村さんの非常勤講師の職を守るために尽力した）

植村さんが韓国カトリック大学に移るようになった時は、韓国に追いやってしまったと、内心忸怩たるものがあった。植村さんの処遇をめぐって学内は2分し、植村さんの心の起伏が大きいのが気掛かりだったこともあった。この5年間で植村さんは成長した。彼を鍛えたのは皆さんだと思うが、櫻井氏かも知れない。この裁判は植村個人のための裁判ではない。絶対に負けてはならない裁判だ。私たちの運動は民主主義を鍛える運動だと強く思う。

■歴史を語り続ける責任

崔善愛（チェ・ソンエ）さん（支える会共同代表＝東京と札幌のたたかいを支え続けているピアニスト）

私は外国人登録法の指紋押捺を拒否し、米国留学からの再入国不許可の取り消しを求める裁判を経験した。当時、この日本社会ではどんなに声をあげても伝わらないと思った。しかし裁判という機会を得て多くの人と出会い成長することができた。今日の裁判でもし勝ったとしても今の日本では一時的に変化しても根本的には変わらない状況にある。私たちは裁判に勝っても負けてもずっと歴史を語らなければならない責任があると思う。

■ジャーナリストの仕事を否定

新崎盛吾さん（元新聞労連委員長＝東京訴訟の支援を続ける共同通信記者）

判決は残念だ。しっかり取材し裏を取り正しい情報を世の中に送り出そうとする記事が、単なる伝聞で書いた記事に負けたからだ。櫻井氏がどのような取材をし、どう裏取りしたのか。それが違っていたことは、法廷で見事に立証された。植村さんの記事は、ウソではなく名誉棄損に当たることまで認めながらの判決だった。プロ意識を持って取材している記者やジャーナリストの仕事を否定するものだ。

■市民と共にしっかりと支援

南彰さん（新聞労連委員長＝9月に就任した朝日新聞記者出身）

タブー化強制社会へ、日本がどんどん進んでいる。正しい歴史認識を市民と共有しながらしなやかな社会を目指す記者が出て来るのを妨げかねない判決だ。今後も市民と一緒に、しっかりと支援を続けていく。

■闘い方に問題はなかったか

植田英隆さん（グリーン九条の会＝8月に市内の交差点に植村さんの著書『真実』の広告看板を出した）

この看板は勝訴の判決で差し替える予定だったが東京訴訟の判決が出るまで続けるつもりだ。これまで9回くらい傍聴してきて勝訴を信じていた。こうした判決を予想できなかった、こちらの闘い方に問題はなかったのだろうか。

■我々こそ全員野球で

喜多義憲さん（元北海道新聞記者＝札幌訴訟唯一の証人として2月に法廷に立った）

日本のジャーナリズムは腹をくくらなければならぬと感じる。権力の側とジャーナリズム側の力はメジャーリーグと高校野球ほどの差がある。われわれは会社の壁、活字と電波の境を超え、連帯してやっていかないと、とても相手に及ばない。今の内閣を安倍さんは全員野球内閣と言った。次々ぼろが出てきているが、全員野球は我々にこそ必要だ。そうでなければ、この問題だけでなく憲法、原発などの問題に間に合わない」

■超党派で運動を支えた

七尾寿子さん（支える会事務局長＝支援市民グループをまとめ、先頭で率いてきた）

植村裁判を支える運動は超党派だった。毎回傍聴席を埋めて市民の注目度を裁判官に理解してもらおうと、多くの団体を回り、傍聴の抽選の列に並んでもらった。連合も道労連も一緒に並んでくれた。櫻井さんの言説がどう変化していったか、櫻井さんが書いている本90冊を買って読んだ。多くの市民が協力してくれた。市民、労働者の力でここまで来ることができた。金学順さんが慰安婦だったと名乗り出た時は67歳だった。私は今65歳です。がんばります。

■事実の探求は絶対条件

三上友衛さん（道労連議長＝傍聴支援や集会参加をサポートしてきた）

権力におもねた、相当に権力を気遣った判決だ。民主主義の根幹は、少なくとも事実を探求したうえで議論し、決めていくのが絶対条件と考えている。そんなプロセスはどうでも良いと言われた気がする。根拠がなくても発言し、決着がつく前に執行してしまうことが労働現場でもある。私たちは事実を積み重ね、事実を突きつけて対抗していく。私たちは諦めるわけにはいかない。

■疑心暗鬼の目で権力監視を

岩上安身さん（IWJ代表＝植村さんのインタビュー番組をライブ中継するために札幌に来た）

判決は櫻井よしこをジャーナリストとみなしていないことになる。名誉棄損と認めながら植村敗訴となったのは忖度か政治の介入か。彼女は日本会議の看板広告塔だ。今は傷をつけず温存するという政治的意思が働いたのではないかと、非常にうがった見方をしている。日本会議は「憲法改正が発議されたら国民投票に行く」という草の根署名活動に全力で取り組んでいる。権力はあらゆる手段を使う、三権分立なんて知ったことじゃないと。私たちは疑心暗鬼の目で権力を監視すべきだと思う。

■控訴審でがんばる

伊藤誠一弁護士（札幌訴訟弁護団共同代表）
さきほど植田さんから、こういう判決を予測できなかったのかと発言があった。本当に申し訳ない。植村さんを敗訴させた「真実相当性」に、こちらはきちんと論陣を張った、やるだけのことをやったけど、こういう結果になったことを申し訳なく思う。札幌高裁の控訴審でがんばる。

■ただの通過点に過ぎない

神原元弁護士（東京訴訟弁護団事務局長）

東京では慰安婦問題のデマの大元になっている西岡力と、週刊文春を発行の文藝春秋を訴えて、今月28日に、最終弁論があり結審する。そこで判決日が示されるだろう。今日の判決は、本人が捏造だと思っているのだから捏造だ、と言っているだけだ。

11月22日に札幌高裁に控訴しました。東京訴訟が11月28日に結審し、来年3月20日に判決が言い渡されます。ブログ<http://sasaerukai.blogspot.com/>をご覧ください。

韓国の民主化運動を学ぶ旅



10月19日から22日まで、植村裁判を支える会の仲間と日韓を往復する植村隆さんを訪ね、韓国の民主化の闘いを学びました。

20日、韓国カトリック大学校の広いキャンパスを散策。札幌にある山とそっくりな三角山が懐かしい。公園ではカササギがたくさん飛んでいました。自然豊

かで紅葉が見事でした。

電車に乗り、賑やかな広蔵(クアンジャン)市場で韓国のすごいエネルギーに圧倒されました。あらゆる日用品や食品、屋台が並び庶民の生活を支えています。緑豆チヂミが美味しかったです。

タクシーで新村(シンチョン)に向かいました。途中でパク・クネ大統領の不正行為や独裁政治に抗議してろうそくデモを行った有名な光化門(クアンファムン)広場を通りました。この広場を週末ごとに集会の自由を守るため埋め尽くした人々の怒りが伝わってくるようでした。(写真はキム・ミネさん撮影の光化門広場のろうそくデモ)



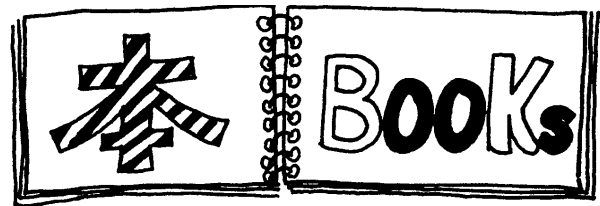
帰宅後にテレビでドキュメンタリー「パク・クネ弾劾の舞台裏」を見ました。大統領の疑惑を誰よりも早く掘み、世に知らせようとした記者、イ・ジンドン。すべての始まりは知人から受けた1本の電話でした。およそ2年に渡る極秘取材で大統領の陰に潜む、チェ・スンシルの正体を突き止めますが報道に圧力が加かったのです。その取材を引き継いだ

のがソン・ヨンソクが率いる取材チームでした。大統領の不正に深く関わったチェ・スンシルの机だけが残された事務所の引き出しから、この物証を手にしします。タブレット端末からは大統領の未公開写真や政府の機密文書などが見つかります。そこでヨンソクたちは作戦を考え、報道に踏み切ったのです。一気に韓国市民の怒りは広がり、大統領の罷免を求めて、全国で170万人がデモに参加したというからすごい。自由に、それぞれのパフォーマンスでデモに参加する娘や息子に、親世代は「政府の不正に目をつぶったことが申し訳ない。子どもたちには良い国を残したい。自由に発言できる国になることを願っています」と語っていたのが印象的でした。

記者たちが権力に果敢に立ち向かうジャーナリズム精神に感銘を受けました。

の包丁さばきが見事でした。曲芸もあり、1時間半、たっぷり笑わせてもらいました。

度重なる独裁政治に民主化を求めて闘ってきた人々の歴史をたどる旅から、たくさんの勇気をもらい、10月22日帰国しました。



みな、やっとの思いで坂をのぼる 水俣病患者相談のいま

永野三智著 ころから1944円

不知火海を見下ろす丘の上に水俣病センター相思社がありま

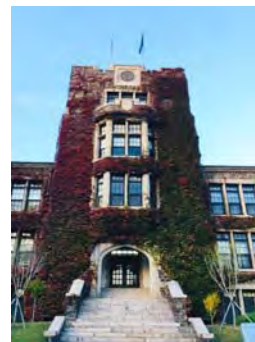
す。水俣病はもう終わったと思っている人は多いと思います。私も2年前に水俣を訪ね、水俣病センター相思社と歴史考証館に行き、なお10万人以上の潜在患者さんがいる事を知りました。

本書は生まれ故郷でいまもタブーとされる水俣病事件の当事者たちと接するようになった永野さんが、機関紙に綴った「水俣病のいま」を伝えるための連載「患者相談雑感」と自身の日記に加筆して一冊にまとめた記録です。

永野さんは「原因企業がチッソだと分かった後も、市民の患者に対する冷たい眼差しは変わらなかった。チッソを大切にすあまり『チッソはこうしてほしいはず』という前提でものを考え、行動した市民は少なくありません。(略)水俣はものを言えず何かを隠す後ろめたい重苦しい感覚に、長いあいだとらわれてきました。『水俣病』という言葉がタブーにしてしまった」と書いています。水俣病ではないかと思うと来てても声に出せずにきた人々。やっとの思いで語りだす人々の声を永野さんは丁寧に聞いてきました。

ある女性はこう語りました。「朝から晩まで魚、魚、魚。おやつもいりこ。肉なんかない、魚しかなかけんですね」「耳鳴りがもう20代から延々と続いています。夜が一番キツイ」。彼女たちの話を聞いて「この人たちが水俣病でなくて、誰が水俣病なんだろう」と永野さんは記します。語りだす人の中には差別し、差別されてきた両方をあわせ持つ人も多いとも。

そんな永野さんでも、患者さんに何もできないと落ち込むこともありました。石牟礼道子さんに苦しい胸の内を明かすと「ああ、あなた、悶え加勢しよるとね。そのままではよかですよ。苦しい人がいるときに、その人の前をただおろおろとおろおろと、行ったり来たり、それだけでその人の心は少し楽になる。そのままではよかとですよ」と。その言葉が今も支えになっていると記しています。悶え加勢するっていい言葉だなと思います。



次に向かったのがイ・ハンヨル記念館です。「1987、ある闘いの真実」でも描かれていた6月の民主化抗争で、警察の発砲した催涙弾で犠牲になった延世(ヨンセ)大学(左写真)の学生のイ・ハンヨルの勉強机や家族写真、犠牲になった当時着ていたTシャツや新聞記事な

どが展示されていました。驚いたのは、先生に連れられて10人近くの小学生が民主化闘争の歴史を学んでいたことです。日本との違いを肌で感じました。1987年の民主化抗争はろうそくデモの原点と言われています。

金大中図書館(右写真)にも行ってきました。近現代史を学ぶには金大中が歩んだ平和への道のりを知ることがとても大事です。この日、韓国カトリック大学の植村隆さんの講義を受けている学生20人が参加しました。



21日、同大学の学生キム・ミネさん(写真中央)の案内で、西大門刑務所歴史館を見学しました。

近現代期、韓国の人々の苦難の歴史を象徴した博物館です。日本の支配下で祖国の独立を勝ち取る

ために活動した人々、解放後は独裁政治と闘って犠牲になった人々が鎖に繋がれました。狭い監獄に宙吊りのろう人形があまりにリアルで、直視できない所もありました。日曜日でたくさんの市民が訪れていました。日本人として恥ずかしくて、目を上げられずそっと見学しました。韓民族の抵抗の歴史が現代に脈々と繋がっていると感じました。

旅の最後に明洞(ミョンドン)でナンタを鑑賞しました。キッチン道具を楽器にしてダイナミックな演奏と、ダンスを楽しみました。俳優さんたち

永野さんは患者さんと同じ目線で受け止めるからきっと話しやすいのですね。そんな優しさも伝わってきます。

巨大な権力と闘った川本輝夫さんや、母の認定申請の棄却処分の取り消しを求めた溝口秋生さんの闘いは、多くの人々の認定につなげたと言われ、先人への尊敬の念も忘れません。

「水俣病の苦しみは今も続いている。この人たちは社会から常に虐待を受けてきた。私たちはその社会を構成している」と記しました。「つらい思いをしている人の声が受け止められる社会にしたい」と述べています。是非お読みください。

申し込みは 相思社へ。TEL 0966-63-5800 FAX0966-63-5808 info@soshisya.org



たいわけんぼうBOOK+

水野スウ著 発行元：紅茶の時間
900円

石川県津幡町で週に1回、自宅を開放して“紅茶の時間”を開いている水野スウさんは、「銀河通信」の長い読者です。10年以上も全国各地に出向き、憲法を語り合ってきました。

2015年に『わたしとあなたのけんぼうBOOK』を出版。今回はその第二弾です。

13条の個人の尊重や12条の不断の努力が明記されていることを知り、私は憲法のことばの美しさに気がつきました。憲法は人をしばるものではなくて、守ってくれるもの、私たちの味方なのだと言います。スウさんは憲法を自分ごとと思えたらもっとも生きやすい社会を私たち自身ができることができると語りかけます。

本文は9章で構成。平らに相手と対話しながら考える過程を綴っていて思わず「憲法って深いですね」と相づちを打っていました。

憲法9条に安倍首相が「自衛隊を書きたそう」と言い出してから改憲の動きが加速しています。しかも国民投票をしようとしています。スウさんは、ということなのかと深く追求しました。すでに憲法違反の「集団的自衛権」は強行採決で決定しているのですから。「国民投票でこの案が通ったら、この自衛には他国の戦争にも参加する、集団的自衛権ももちろん含まれていますよ、それを国民のみなさまがお認めになったんですよ、っていうつもりかもしれませんが」と警告しています。9条が変われば、12条と13条の意味も変わってくる？改憲のもくろみがよく理解できます。普通の市民の目で書かれていて、親しみやすく心に届きお勧めです。

この2冊のけんぼうBOOKが、今年度の第24回「平和・協同ジャーナリスト基金」の荒井なみ子賞を受賞しました。1995年に設立されたこの賞は、市民がお金を出しあい、選び、市民が贈る日本版ピューリッツァー賞とよばれているもの。平和、反核、人権、協同、連帯の分野ですぐれた作品を発表したジャーナリストを毎年、数人選んで表彰しているそうです。素晴らしいですね。ますますの活躍に期待しています。

イラスト・編集・デザイン：mai works 注文はfax 076-288-6093 水野スウさん、または mail@mai-works.comへ。

『わたしとあなたのけんぼうBOOK』は191号(2015.9.25)で紹介。

評伝 管野須賀子 ～火のように生きて～

堀和恵著 郁朋社 1,620円



自由の翼を求め続けた管野須賀子は、大逆罪で死刑になった唯一の

女性です。29歳の生涯でした。大逆事件そのものが、大がかりにフレームアップ（デッチあげ）された虚像であり、断じて刑の執行など許されるものではありませんでした。彼女はまた、長く妖婦というレッテルを貼られ続けました。堀和恵さんは、たくさんの記録にあたり、現場を訪ね、須賀子の生い立ち、ジャーナリストとしての才能、荒畑寒村や幸徳秋水との「愛と葛藤」などを誠実に掘り起こし須賀子の実像を浮き彫りにしました。

須賀子が知的で正義感あふれ、心やさしい女性であったことを生き生きと描写しています。須賀子の書いた文章から理想の社会を求めたことに感銘を受けました。

また検事、平沼騏一郎がどんな人物であったのかも描き出しています。平沼は検察、そして司法省の権力の維持と強化に力を注ぎ治安維持法への先鞭をつけていった人物だったのです。須賀子たちの裁判で、平出修弁護士は、鋭い反論をしています。平出が森鷗外から教示を受けたという事実は初めて知りました。石川啄木も当時の内閣による社会主義者弾圧だと気が付いていたという文章も貴重です。「大逆事件」は百年前に終わったわけではなく、連綿として日本の司法の中につながっています。奇跡的に発見された須賀子の「死出の道艸（みちくさ）」の一文には、「憐れむべき裁判官よ、汝等は己れの地位を保たんが為に、単に己れの地位を保たんが為に、己れの地位を安全ならしめんが為に、不法と知りつつ無法と知りつつ、心にも無い判決を下すの止むを得なかつたので有う。憐れむべき裁判官よ政府の奴隷よ、私は汝等を憤るよりも、寧ろ汝等を憐れんでやるのである」と裁判の在り方を批判しています。

須賀子の辞世の句に「残しゆく 我が二十とせ（はたとせ）の玉の緒を 百とせ（ももとせ）のちの 君にささげむ」この句には「自由でみなが幸せに暮らせる理想の社会がつまっているのだ。そしてそれは、『百年後の君』へと捧げられているのだ」と堀さんは締めくくりました。暗黒時代に戻してはならないと思います。

須賀子への共感がなければ、書けない評伝で堀さんの生き方も見えてくるようでした。

須賀子が処刑される前日に書いた真柄（社会主義者・堺利彦の娘）への優しさあふれる手紙に泣きました。



歌がなくては人間らしく
生きてはいけない

笠木透メモリアルCDブック
音楽センター 3, 500円

笠木透（2014年没）の集大成となるメモリアルCDブック。

ブックレットには、笠木透さんの語り、中川五郎さんをはじめ共に生きた仲間たちによって笠木さんが生き生きと活写されています。CD（2枚組）には「笠木透作品をうたうコンサート」のライブ演奏を含んだ29曲を収録しています。

笠木透さんとフォークソングとの出会いは、中津川芳音に参加し、1966年「ぜんまい座」を立ち上げたことに始まります。ピート・シーガーの演奏を聴き、「フォークソングは誰が作ってもいい、誰が歌ってもいい音楽なんだ」と、目覚めます。人間らしく生きるために必要なうたであり雑木のような、名もない人々のうただと考えました。笠木さんはクッキングハウスの応援団でもあり、「心の病気をした君たちだからこそ、自分の思いを自分の言葉で表現できる。下手でもいいからやってみよう」と提案して、出来た作品は30曲以上。クッキングハウス30周年では2年がかりでミュージカルドラマを作り、クッキングハウスの仲間たちは1時間半にもなる「いのちの輝き希望のあかり」を歌いました。私も会場で聴き、正直でやさしい歌に涙がとまりませんでした。笠木さんが生きてらしたらどんなにか喜んだことでしょう。

笠木さんの歌は弱い人々に心を寄せ、弱い人の目線で生まれた歌が多いです。歌ったように生きなさいというメッセージが込められています。私が好きな歌は「君は君の主人公だから」です。君のやさしさは君のものだから とりかこむ世界にゆだねてはいけない 昨日を今日につなげるために 今日を明日に手渡すために

銀河通信を続けることが困難な時もあったけれど、時代に流されずに生きてきた笠木さんの歌に自分の生き方を重ねています。

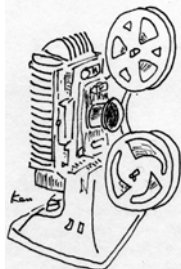
これからも「文化で闘う」人々を励まし続けていくでしょう。

「ノモレ」「モンテレッジオ 小さな村の旅する本屋の物語」も紹介したかったのですが紙面がなくなりました。次号に書きたいと思います。

日日是好日 大森立嗣監督・脚本



「本当にやりたいこと」を見つけることがで



きず日々を漠然と過ごしていた大学生が、茶道を通じて進む道を模索していく姿を優しく描いています。

雨の日は雨を聞く。雪の日は雪を見て、夏には夏の暑さを、冬は身のきれるような寒さを。五感を使って、全身で、その瞬間を味わえば、-7-たそうです。

かけがえのない一日になるという「日日是好日」。この日この時の出会いは一度きりと心得て、誠意を尽くそうと説く「一期一会」。

先日亡くなった樹木希林さんがお茶の先生を演じました。「こうして毎年同じことができるってことが、幸せなんだなあってね」という言葉に樹木さんの人生が重なり、心に沁みました。

主人公の20数年を一人で演じた黒木華が見せる多彩な表情は、多感な主人公の心情を映し見事でした。そしてその主人公の人生の困難な時も優しく包み込む先生役の樹木さんの静謐さが心地良く、観る者の心まで慰さめてくれるようでした。

公開を待たずに亡くなった樹木さん、ご冥福をお祈りします。

運命は踊る サミュエル・マオズ監督



男性も女性も徴兵制度があるイスラエル。ずっと他国と戦争を続

けています。サミュエル・マオズ監督は20歳の時にレバノン戦争に従軍した経験があります。「人を殺すか自分が殺されるかの世界に放り込まれた」体験を20年後に映画にしたのが「レバノン」でした。初監督でベネチア国際映画祭で金獅子賞に輝きました。

この映画は、戦争が日常化した状態が人間をどのように狂わせるのかを独特の映像美で突き詰めます。監督も「イスラエル社会全体が強くあらねばと、とらわれすぎていると気づいた」と語っています。

ミハエルとダフナ夫婦のもとに息子ヨナタンの戦死の報が届きます。表情のアップや長回しの映像からミハエルの動揺が伝わってきます。その後、誤報の知らせが届き、家族や身内は安堵しますが、ミハエルは激怒。息子の帰還を軍に迫ります。息子ヨナタンら若い兵士4人は、ラクダがのんびり横切る無人地帯で国境警備を続けていました。戦場とは思えない静寂さが異様に緊迫感がありました。敵が見えない。けど機関銃がある怖さを皮肉を込めて描くのです。ヨナタンは検問で間違っって一般人に発砲してしまいます。帰還途中では想定外の事故に遭遇します。3部でミハエルのトラウマが語られます。そうしてミハエルは自分の弱さを初めて認めるのです。戦争は今も続いていると静かに訴えます。言葉は少ないけれど、夫婦、息子の追い詰められていく心理が、手に取るように伝わってきました。戦争の本質を鋭く突いた作品でした。

原題は「フォックストロット」ステップが元に戻るダンスのように運命は戻ってくるという意味です。

イスラエルの文化大臣が「有害な映画」と批判。制作費を出すべきでなかったと言っ

普通の人々の行動が
韓国の民主化をつくりあげた

『1987、ある闘いの真実』

樋口 みな子

札幌映画
サークル
シネアス
ト11月
号掲載

『タクシー運転手 約束は海を越えて』は1980年に韓国の光州で起きた反政府運動の学生や市民を空挺部隊が弾圧。大量の死者を出した虐殺事件を描いた映画でした。

それから7年後、市民の自由と平和を叩きつぶす全斗煥大統領の軍政下で、市民が民主主義を取り戻そうと闘い大統領直接選挙を勝ち取ります。その1987年「6月民主抗争」を描いたのがチャン・ジュナン監督の『1987、ある闘いの真実』です。監督はこの素晴らしい歴史が語られる機会が少ないことに気づき、ひとりの父親として伝えていかなければいけない大切なことだと考え、たとえ当時のパク・クネ政権から踏みつぶされても映画にしようと思いついたそうです。

映画は、民主化を叫ぶ市民の声が高まる1月、警察の取り調べを受けていたソウル大学生の謎の死から始まります。証拠隠滅のためパク所長は検察に遺体の火葬を要請しますが、チェ検事は拷問を直感。決して判を押さず解剖を命じ、反乱の一步を踏み出します。心臓麻痺だと嘘の発表を続ける警察。しかし、現場に残された痕跡や解剖所見は拷問による死亡を示し、事件取材していたユン記者は「水拷問中の窒息死」と報道します。これにパク署長は刑事2人だけを拘束させて、事件を矮小化しようとしています。どこかの国の首相と同じですね。一方、刑務所に収監された刑事から事件の真相を知った看守ハンは、この事実を伝達するため、大学生の姪のヨニに危険な使いを頼みます。普通の市民が良心に従って行動し、リレーのようにつながっていきます。

映画は当時の様子をリアルに再現しつつ、エンタテイメント性も兼ね備え、最後まで観客を引っ張って素晴らしい。独裁に抗い真実を追求する姿に共感。見ている私も熱くなり、ついつい感情移入して引きこまれました。ハン看守への拷問がさまざま、こんなことがつい31年前の韓国で実際に行われていたことに慄然としました。「根が優しく、面倒見も良くて、最後に男気を見せる役」と言ったらこの人、今回の看守役も大向こうから



声がかかるようなハンを演じたユ・ヘジンが印象的でした。『タクシー運転手』でも面倒見のいい運転手を演じていましたね。

監視下に置かれた新聞社の視点、検察や看守など内部からの視点、そしてイマドキ女子大生という最も政治からは遠いと思われる存在からの視点を軸に置いた複数のストーリーが交差し、いかに韓国が民主化の道を行んだか、彼らの力がどのように歴史を変えてゆくのかがドラマチックな展開を挟みつつ、ラストまで一瞬も目が離せませんでした。監督のこの映画にこめた思いがひしと伝わってきました。「1987年を振り返り、歴史の鏡とすることができるなら、次世代への大きなプレゼントになると思う」と監督は語っています。

政治に関心のなかった女子大生のヨニが、デモに向かってただひたすら走っていくラストに涙が止まりませんでした。それは「もう黙ってはいない」とこぶしを挙げ、たくさんの市民と共に前へ向かっていく姿でした。歴史は過去のことでなく未来と地続きです。排外主義的なヘイトスピーチを許す我が国が恥ずかしい。日本人こそ観るべき作品だと思います。私にとって今年観た最高傑作です。

ボヘミアン・ラブソディ
ブライアン・シンガー監督

1970年代から80年代に活躍したイギリスの人気ロックバンド「クイーン」のボーカル、フレディ・マーキュリーを描いた伝記ドラマがSNSで話題になっています。「クイーン」の音楽は聴い



たことがあってもフレディの知られざる孤独をこの映画で知りました。世界中から賞賛されているとき、何を考えていたのか、家族と呼ぶ「クイーン」のこと、愛する人への思いなどが丁寧に描かれていました。歌はダイナミックですが、心は繊細で包んでくれるような愛情を求めていたようです。

なんと演奏された曲は28曲。フレディの歌声と表現力がラミを通して目の前に立ち現れる、その臨場感が素晴らしい！「ライブ・エイド」が開催された1985年7月13日ロンドンのウェンブリー・スタジアムには7万人以上の人々が押し寄せ、熱気に包まれました。ラスト21分間の演奏に心を奪われ感涙しました。

購読料と寄付をありがとうございます(敬称略)
10.9~11.27

柴崎徹(調査報告書も)/成田明/中川充/岩井善昭/高澤光雄(著書)/塚本裕子/内田篤のり/花崎泰平/新妻徹/藤谷和廣/高橋雋(切手も)/堀和恵(著書)/梅沢俊(カレンダー) 合計20,000円は印刷と送料に使わせていただきます。また著書の寄贈もありました。合わせてありがとうございます。■郵送料が大幅に値上げしました。来年1月から年間1500円とします。郵送を希望しない方はFax 011-382-9020 または minginga@agate.plala.or.jp にご連絡ください。